知的基盤としての博士課程

— 放送大学大学院で問いを学術的知へと深める —

人間科学プログラム

伊藤　紀子

社会で経験を重ねるほど、自分の中に生まれる問いは深くなっていきます。日々の生活や仕事の中で感じてきた違和感や問題意識は、そのままでは個人の経験にとどまりがちです。しかし、それを学術的な方法で見つめ直すことで、より広い社会や制度への理解につなげていくことができます。私にとって放送大学大学院は、まさにそのような学びを可能にしてくれる場でした。

研究大学におけるマネジメントとグローバル戦略に長年携わる中で、日本の研究大学が直面する課題は、少子化や財政制約だけでは説明できないと考えるようになりました。そこには、知識創出と資金循環、国家戦略と大学の役割、さらにはアカデミアと現代社会の経済構造との関係を見直す必要がありました。

この問題意識から、博士課程では、日本の国立研究大学における持続可能な資金調達システムを研究テーマとしました。政府支援、民間資金、産業界連携という複数の資金構造を国際的に比較しながら、研究大学における知的価値と資金循環の関係を考察しました。これは、教育社会学、高等教育政策、経済学、組織論、イノベーション政策、国際比較、大学ガバナンス論などにまたがる、学際的な研究でした。

だからこそ、放送大学大学院の環境は、私にとって大きな意味を持ちました。一つの専門分野だけでは扱いきれないテーマを、狭い枠の中に押し込めるのではなく、問いの広がりを失わずに学術的に深めていく。そのような学びを支える土壌が、放送大学にはあります。

特に印象に残っているのは、先生方との対話です。研究手法や先行研究についての指導にとどまらず、「なぜその問いを立てるのか」「その研究は社会においてどのような意味を持つのか」といった本質的な問いに向き合ってくださいました。現場で抱いていた問題意識は、その対話を通じて、少しずつ研究としての言葉と方法を獲得していきました。

また、社会人にとって、放送大学の柔軟な学習環境は大きな支えでした。オンラインを活用した授業や研究指導により、仕事を続けながら研究を深めることができました。多忙な業務や海外出張の合間にも学びを継続できたことは、単なる利便性を超えて、社会人が知的探究を継続するための重要な基盤でした。

この学びは、研究者だけに開かれたものではありません。むしろ、社会の中で複雑な課題に向き合う実務者にとってこそ、重要な意味を持つのではないかと感じています。現場で生まれた問いを、科学的な方法によって鍛え直し、より広い社会に通じる知へと育てていく。その訓練は、行政、大学、企業、国際機関などで意思決定に関わる人にとっても、大きな意味を持つはずです。また、こうした科学的方法論は、専門分野や国境を越えて研究者や政策関係者と対話を行うための共通基盤にもなっていると感じています。

実際に、研究を進める中で、国内外の研究者や政策関係者との対話においても、自らの経験をより構造的・理論的に位置づけながら議論できるようになりました。そこで身につけた科学的方法論と学際的視点は、現在の実務を支える確かな知的基盤となっています。

学びの時間を振り返ると、学位記授与式での一場面が今も心に残っています。指導教員であり、学長でもある岩永雅也先生と目が合い、小さくサムズアップを交わした瞬間、長い時間をかけて取り組んできた研究を、先生方が見守り、支えてくださっていたのだと実感しました。

放送大学大学院は、社会で培った経験や問いを学術的な思考へと接続し、新たな知へと育てていくことのできる場です。私の問いを受け止め、研究として育ててくださった先生方、そして社会人の知的探究を可能にする放送大学大学院の環境に、心より感謝しています。

人間科学プログラム修了生

私は令和 4 年に放送大学大学院の人間科学プログラムに入学しました。入学当時は公立中学校の教員として勤務しており、日々の授業や校務に追われる中での決断でしたが、「もっと広い視野で数学教育を研究したい」という強い思いが背中を押してくれました。入学のきっかけは、教授学習心理学がご専門の進藤聡彦先生との出会いです。私は以前から、数学の授業にプログラミングを取り入れることに可能性を感じており、その効果を科学的に検証したいと考えていました。進藤先生から教育心理学的な研究手法を学びたいと思い、門を叩きました。

博士論文では「数学教育におけるプログラミング導入の在り方」について研究しました。現行の学習指導要領では、数学の授業でプログラミングを扱うことはあまり期待されていませんが、実際には両者には高い親和性があります。私はこれまで授業を通じてプログラミングの有効性を感じており、それを定量的なデータを用いて教育的効果として示すことに挑戦しました。教育心理学の視点を取り入れることで、より信頼性の高い研究としてまとめることができたと思います。放送大学での学びの魅力は、専門の枠を超えた交流にもあります。同じプログラムに在籍していた方々は、教育学や臨床心理学など多様な分野で活躍されている方ばかりで、全く異なるテーマの研究を共有し合える環境が整っていました。異分野の研究手法に触れたり、ディスカッションを通じて新たな視点を得たりすることは、非常に刺激的でした。研究を進める中で、私自身の勤務先も中学校から大学へと変わり、授業準備や大学業務で多忙を極めましたが、放送大学は働きながら学ぶ人へのサポートが充実しており、本当に助かりました。オンラインでの授業や、夜間や土日の研究指導といった柔軟な学びの機会があったからこそ、研究を続けることができたと思っています。

現在は、教員養成系の大学院で教鞭を執ることになり、これまでの学びや経験を次世代の教師たちに還元していきたいと考えています。放送大学で得た知見や研究経験は、今後の教育実践や研究に必ず生きてくると確信しています。大学院での学びは、自分の考えや実践を深め、次のステップへと進む大きなきっかけになります。もし進学を迷っている方がいれば、ぜひ一歩を踏み出してみてください。放送大学には、その一歩を支えてくれる環境があります。

学生の主体性が活かされる学びの場

人間科学プログラム
中川登紀子

放送大学院を志望した大きな理由は、学生の主体性が尊重されるところと、仕事と両立できそうだと感じたところでした。

博士号を取得すると決めた時、様々な大学院を検討しました。ほとんどの大学院は出願前に指導を希望する先生と面談する必要があるのですが、私が研究したい分野の先生がほとんどいらっしゃらず、非常に悩ましい点でした。その点、放送大学大学院は学生の主体性が尊重され、指導を希望する先生が研究テーマでふるい落とすというようなことがなく、研究計画等の内容や入試での実力で評価される点が魅力的でした。

仕事と両立できそうである点も魅力的でした。ここでいう「両立できそう」とは、決して楽に学位が取れるという意味ではありません。時間的・場所的な柔軟性が高いという意味です。授業や研究指導はマンツーマンや少人数で行われることが多く、日程面の相談に乗って頂くことができました。またコロナ禍に重なったこともありますが、オンライン会議システムでも指導を受けることができました。在学中に予期せず出産・育児を経験することとなったため、結果的にこの柔軟性の高さには大変助けられました。

指導教員の森先生、高橋先生、大橋先生には、研究を進めるにあたり、必要な時に必要な情報をご提供頂いたり、論文作成に当たって鋭いご指摘を頂くなど、論文執筆を応援して頂きながらお力添えを頂き、何とか無事修了することができました。博論の予備論文執筆から最終提出までの1 年間は特に苦しかったですが、修了できたときの感慨も大きいものでした。主体的に、そして計画的に研究を進めていく自信のある方には大変素晴らしい大学院だと思います。

博士論文の完成に取り組んだ日々

人間科学プログラム（臨床心理学領域）
玉井仁

大学院修士課程を修了して約四半世紀，医療機関や民間相談室等における心理臨床活動を中心に生活をしておりました。並行して，自分の臨床活動の向上のためにも，時々追われるように学会投稿論文にも取り組んできておりました。ただ，年と共にその意欲が落ちてきて，自分を奮起させるためにも博士課程の進学を決めました。

私の博士課程に所属していた期間はコロナによる自粛期間と重なったこともあり，全授業は，オンラインで行われました。また，直接に先生方とお会いする機会がなく，一般の大学院におけるゼミなどでの多人数での話し合いがないことは，寂しくも感じられましたが，いろいろな仕事を抱えながらの中では，日程調整も柔軟にできましたので本当に助かりました。研究指導の最後，博士論文の仕上げのところで大学で直に先生とお会いして，ご指導を頂けたのは，学びが空気と共にしみ込んでくるような豊かな時間でした。放送大学は，元々そのような形で学ぶ体制がしっかりされていたことで，コロナだから，ということではなくスムーズに学びを継続できたと感じられます。

私は心理臨床活動については，それなりの経験も積んできておりましたが，学術領域における研究姿勢や作法はよくわかっておりませんでした。主指導教官であった大山泰宏先生を中心に，ご指導を頂いた先生方には，学術領域が持つ厳しさと奥深さを体感させていただく贅沢な時間でした。また，それまでは必要に迫られ専門とする領域の内外，広く手を出しておりました。改めて，論文を書いていくために，そして投稿を進めていくために，散らばっていた学びを改めて体系だって学びなおせたような感も持つことが出来ました。

そして，自分の中での学びが深まる実感は，自分の臨床にも影響を及ぼしていきました。臨床の場において，自分を俯瞰できることが大切だとはよく言われることですが，その俯瞰するための足場がより広がっていくような感覚であったともいえるかもしれません。これは，私としては想定外に大きな収穫であり，適切な指導の下で学びを進めるという作業が，自分自身の在り方に影響を与えていったことを実感します。ある意味，臨床のスーパービジョンを受けているような感覚でもありました。

かつて，臨床を続けていくためには，臨床実践と並行して学び，即ち研究をしっかり続けていき，それらを両輪として進んでいくことを教わっておりました。そうはいいましても，一定の経験を重ね，日々忙しくしておられる臨床家の方々にとり，その時間を見つけることは簡単ではありません。しかし，放送大学という学びの場は，そのようなことを希望される方々に適していると思われます。学術的な姿勢を高く維持しておられる先生方との出会いは嬉しい刺激でもあります。自分が書いた研究論文を最初に見ていただき，それについて議論をしていくことで，新しい視点を獲得していく，その様な過程は臨床とも繋がります。決して楽ではないのですが，この豊かな学びの体験の時間を，皆さんにも味わっていただきたいと思います。

放送大学 大学院への入学を検討されている方へ

人間科学プログラム

伊藤 通子

● 自分のペースを大切にしながら学べる大学

私は、20 歳で工業高等専門学校を卒業し、国家公務員の資格（工学系）を得て、卒業後は母校で技術職員として働いていました。学校という場で仕事を続ける中で、徐々に教育の奥深さを知るようになっていき、40 歳を過ぎた頃から、教育に関する専門知識や他国の情報をもっと知りたいという欲求が出てきました。ちょうどその頃、放送大学を知り、通学せずに教育学を体系的に学ぶことができスクーリングや試験も近くの大学で受けられると聞いて仕事や家事と両立できそうだと思い、県外で学ぶ娘たちへの仕送りはありましたが自分の学費も捻出できそうだったので入学を決めました。

期待通り、放送大学では自分のペースを大切にしながら体系的に専門分野を学べたことや、素晴らしい教授陣と程よい距離感で触れ合える学風であったこと、また、漠然としているが私にとっては興味あるテーマを学術的に深めることを支援して下さる指導教員に出会うことができたことなど、まさしく私にピッタリな学びの環境でした。

● 放送大学で全ての学位を取得し、果たしたキャリアアップ！

結果的に、学士（49 歳）→修士（52 歳）→博士（63 歳）と、全ての学位を放送大学でいただくことになりました。学士は学ぶワクワク感であっという間の 2 年間、修士は母の看病をしながらの少し大変な、でも探究を楽しんだ 2 年間、そして博士後期課程・・・知力はもとより気力・体力との闘いでしたが、先生方はもちろん修了生の先輩からもご指導をいただき学友とは切磋琢磨して、どうにか走り抜けることができたという感じの 3 年間でした。

仕事や家庭をもちながらの、そして年齢を重ねてからの修士、博士という学位取得のための勉学は、正直言って、そんなに楽なものではありません。しかし、放送大学で探究したことを自分の強みに 3 回転職して人生の終盤に至るまでキャリアアップすることができたので、頑張り甲斐はあったなぁと、振り返っています。

● 放送大学で得たもの

私の乗り越え方をまとめると、以下のようになるかと思います。

（1） 自分の中の強い動機ややる気と目標を、常に確認しながら、

（2） 24 時間をどのように使うか、どのように自分自身の精神状態や健康状態を安定させ自分の能力を最大限に発揮するかというセルフマネジメント力を鍛えつつ、

（3） 処理可能感（＝何とかなる、何とかやっていける、大丈夫！） をもって、少し楽観的に・・・

こうして書いてみると、これは放送大学の勉学のみならず、仕事や人生でも困難にぶつかった局面で必要になってくることですので、放送大学では学位取得と同時に、人生に大切な「力」をも鍛えることができた、と言えます。

長年にわたりご指導いただいた岩永雅也先生が学長として学位授与式でおっしゃった「放送大学で深い教養を身につけたことを誇ってください。」との言葉を胸に、まだまだ心もとないですが、もう一つの力「教養」も誇れるような人生となるよう、これからも努力を続けたいと思っています。

皆さんも、ぜひ、放送大学で学んでください。

社会人の実践を研究知へ媒介する学びの環境

人間科学プログラム
青井　拓司

社会人学生が博士後期課程を修了するために課題となる最も大きな要因は、仕事や家庭との両立です。この点、放送大学は一般の大学院とは異なり、時間と距離を超えたカリキュラムの蓄積があります。事実、私も土日中心の集中講義や研究報告会の開催で仕事との両立に困難はなく、その恩恵を享受できました。

また、放送大学大学院は学術界や社会的に著名な教員から指導が受けられる点もメリットです。主担当指導教員の小川正人先生は、教育行政学・教育政策研究の第一人者で、中教審副会長等を歴任された先生でご指導を頂ける時間は贅沢な時間でした。

研究を進めるのは、実に悩み深き作業です。この点、先生に頻繁にメール連絡を取り、研究の進捗管理や研究の進め方等を相談できましたし、視野の狭くなりがちな私の研究を広い視座から位置づけて頂きました。また、社会人学生にとってアカデミックな世界は壁を感じることがありますが、この点も先生から学会や研究会への参加の機会を与えて頂き、そこで得られた感覚は博士論文の基盤となりました。

さらに、研究分野を跨いだ副担当指導教員 2 名のサポートも大きな力となりました。放送大学大学院博士後期課程の研究は、このようにサポート体制が充実しており、社会人院生の課題・関心を研究知へつなげることができる学びの環境を備えています。

放送大学、博士課程後期の体験談

人間科学プログラム
今西　ひとみ

2017 年 4 月の入学式に参加させていただいた日から 4 年があっという間に過ぎました。様々な多くの学びと発見があふれる素晴らしい時間であった、懐かしく思い返す一方で、学期途中は、目の前の課題と奮闘する連続で、日々の仕事と放送大学の学習とのオンとオフを随時切り替える、めまぐるしい時間であったとも言えます。

なかでも、私の研究は海外が対象であったことから、入学前は指導教官について、「自分の研究計画をご理解頂き指導いただける先生がいるのだろうか、また指導教官が決定しても未熟な自分がついていけるだろうか」との大きな不安の中でスタートいたしました。が、この不安な思いは全くの徒労に終わりました。

入学式後、人間科学プログラムの指導教官である岩崎久美子先生に初めてお会いした時、先生は私に「一緒に走りますよ。」とおっしゃいました。その日は全てが初めてのことばかりで、正直なところ先生のこのお言葉がちゃんと理解できていませんでした。が、授業が始まると、この意味がだんだんと理解できてきました。

具体的なゼミ指導は月 1 回のペースで開催され、論文指導が開始されていきましたが、随時、教員、学生問わず、同じような領域の研究仲間の方をご紹介いただき、研究上の課題や情報交換を実施する機会に恵まれました。実はこれは現在の自分の研究や学習面での立ち位置を把握するのとともに、後で行われる博士論文発表のプレゼンテーションの練習として、「頂いた質問に対して制限時間内に簡潔にまとめて説明する練習」になっていたことに後で気づかされたのです。また授業のほうも、人間科学プログラムでの各先生方の厳しくも暖かいご指導がはじまり、マンツーマンの質問しやすい環境の中で、プログラムの各先生に見守られているという感覚を持ちながら学期が進行してまいりました。

なかでも、自分にとって論文を完成するにあたり最もありがたく感じたことは、指導教官が「私は今西さんのペースメーカーです」とおっしゃって、論文作成の最後まで節目、節目で必ず身近な達成目標を提示くださったことでした。このおかげで論文完成に向けての長い道のりを「まだ遠い先」あるいは「もう時間がない」などと余計な雑念を入れず、淡々とルーチンをこなすことに集中できたことです。そしてこれらの繰り返しの最後に、こんな私でも何とか修了までたどりつくことができたのです。感謝の言葉しかございません。

以上が簡単な私の体験ですが、博士課程選択の相談を受けることがございましたら、内容によるかもしれませんが、私は自信をもって放送大学をお勧めしたいと思っております。自分自身は先生にとっては、手間のかかる弟子だったと思います。が、せっかくここまで引っ張っていただいたこともあり、これからも上手な目標設定という手法を自らで実行し、今後の課題に取り組んでまいりたいと思います。本当にありがとうございました。

人間科学プログラム
口分田　政史

他人から見れば，大学教員という立場で，3 年間で学位取得した私は，恵まれた環境で難なく博士論文の執筆を進めた人のように見えるであろう。しかしその実態はとても泥臭いものであった。そんな私の博士課程 3 年間を少しばかり紹介したい。

博士課程 1 年目が，勤務先の異動と重なった。毎日，新たな講義の準備に追われた。最初の数ヶ月は手持ちの PC が職場の Wi-Fi に繋がっておらず，よくカフェを利用した。新しい環境に慣れるのに必死だった。研究は全く進まず，不安と焦りだけがどんどん募っていった。そんな中，私生活では第一子が誕生した。看護師に「パパ似ですね」と言われ，思わず顔がニヤついた。幸せな気持ちに包まれた瞬間だった。しかし消えない不安と焦りから，娘が生まれたその日，妻の病室で，私は必死に論文を書いていた。その後，3 人での暮らしが始まった。産後でメンタルが不安定な妻とこの世に生まれたばかりの命とともに，手一杯の生活であった。両実家は他県にあり，手助けを得ることは難しかった。放送大学千葉学習センターに向かう新幹線の中で，必死に論文をまとめた 1 年目であった。

2 年目に入り，娘が歩き始めるにつれ，私も博士課程の学生としてよちよちと歩き始めた。私の専門は数学教育学だが，博士論文では心理学的なアプローチも採用した。心理学の論文作法には大変苦労したが，数学教育学研究の幅は大きく広がった。こうして研究が軌道に乗り始めた 2 年目の後半，あるニュースが流れてきた。当初はこれほどまでに影響されるとは思っていなかった。コロナ渦に突入した。

3 年目，研究計画が破綻した。私の研究には学校現場での調査や実践が不可欠だった。しかし突然の休校要請に対して，為す術がなかった。仕事では慣れない遠隔授業が始まった。授業動画の撮影で土日は全て潰れた。コロナ渦に翻弄されたのは事実であるが，これを言い訳に修了を諦めようとする自分がいた。一方で先延ばしにしたところで研究が進む状況ではなかった。覚悟を決めて博士論文の構成を練り直した。本審査までの期間は，研究室に篭り続けた。娘をお風呂に入れるのが私の役目であったが，3 年目はできなくなっていた。

迷い，悩み，苦しんだ 3 年間だった。一方で多くの人が私を支えてくれた。とりわけ指導教員の進藤先生には研究活動全般にわたってご指導を頂いただけでなく，何度も励ましのお言葉を頂いた。またプログラム報告会で出会う同期の存在は大変励みになった。家族にも支えられた。娘からは「ぱぱがすきなのは（わたしより）おしごとでしょ」と言われ，妻からは愚痴を山ほど言われた。それでも最後まで励ましてくれた。私一人では学位取得は実現できなかった。

最後に学位が取得できたことを，私が最も強く実感した瞬間を紹介したい。それは指導教員から届いた次のメールを読んだ時であった。

「おめでとうございます。これからは Dr.Kumode です。」